

## 「内視鏡所見のよみ方と鑑別診断 上部消化管」

芳野 純治  
浜田 勉 編集  
川口 実

多賀須消化器科内科クリニック

多賀須 幸 男

一言で評すると、上部消化管の内視鏡検査にたずさわる医師、特にこれから取り組もうとしている者から研修を終わって独り立ちしたばかりの医師には、強力な味方となる必読のテキストである。精読をして、上部消化管の内視鏡歴 40 年以上の小生も、大いに教えられるところがあった。カンファレンスに参加する時間がない開業医は、診断レベルを維持するため、常に座右に置いて参照すべき本である。

全体の 2/3 を占める「所見からみた診断へのアプローチ」の章に、研修医や開業医にいつもつきあっている著者たちが、恐らく最も教えたい、ぜひとも伝授したいと思いつけてきた部分が、1,000 枚近い内視鏡写真を示して詳細に解説されている。

序文に“徹底的に所見を中心据えた”とあるが、内視鏡診断のテキストとしてこの本が素晴らしいのは、浅い陥凹を呈する病変、深い陥凹を

呈する病変、ひだ集中を主体とする病変、ふくらみが悪い病変、巨大ひだを呈する病変といったように、内視鏡所見別に整理して、それぞれに属する病変の自験例の写真を洩れなく蒐集しているところである。恐らくたいへんな時間と労力を要したものであろう。

従来のテキストは、ややもすると見つけたことを自慢するような微小な病変や珍しい病変に偏りがちであったが、本書には目をそむけなくなるような進行した病変や、恐らく初心者が戸惑うであろう近接して写した胃潰瘍の大きな病変なども掲載されていて、これが本当の教科書であらう。

必要な場所には親切な解説やシェーマが添えられ、一部には X 線写真や EUS 像、マクロおよびミクロ像も示されている。しかし著者らはあくまでも、“内視鏡所見から診断する”という姿勢を貫いていて、生

検をしないとわからないというコメントはどこにもない。明記はされてはいないが、すぐに生検をする現在の風潮に活を入れたいという著者らの意気込みに脱帽する。しかし次に生検診断の基本的知識と考え方の章が 30 頁あって、ぬかりのない配慮がなされている。

最後に気がついたことを記すと、食道の章にもいまだ紙数を割いて頂きたかった。多数の症例の中には説明に疑問を感じる箇所が二、三あるが、改訂の際にご一考頂きたい。近頃高価な医学書が多い中で、12,000 円の書価はたいそうリーズナブルである。本書は待ち望まれていた上部消化管内視鏡のテキストである。

● B5 頁 336 図 376 写真 129  
カラー写真 949 色図 43 表 80  
2001 定価 (本体 12,000 円 + 税)  
送料実費